

## 感性、物づくり、物語 — 共感の世界の広がり と 繋がりを考える — (全 12 回)

### 第 4 回 我感じる、ゆえに我あり

長島知正 (早稲田大学理工研招聘研究員)

前回、感性工学は既存の統計解析や人工知能など既存の理論を応用しているだけで、果たして人間の感性に迫れるのか、そして、人と物の新しい関係を謳う感性工学は従来技術の壁を越えた深い感性の領域に踏み込んでこそ、本当の新技术の地平を開けるのではないかと云うことを指摘しました。また、大変大雑把でしたが、そうした深い感性の技術新しさは、「感じる」という人間の本性の中にあることも確認しました。

しかし、現在、「感じる」ということを中心に置いて議論する体系は未だないと思われます。そうした広くまたつかみどころのない状況に、一定の見通しを与えるために、先ず、全体的に感性を捉えることが最も大切なことと思います。そのため、感性を象徴する人物としてパスカルに注目し、彼がどんな人物であったかを通じて、感性の何が重要なことかを考えたいと思います。その後、深い感性の技術に迫るためには、どこに焦点を当てるべきか、具体的切り口について考えます。それは、深い感性を工学として体系化していく方法の糸口にも繋がると思います。そうした「感じる」という人間の本性に注目することによって、深い感性の技術にはどのような新しさが期待されるのでしょうか。

#### 感性的人間像とパスカル：「人間は考える葦である」

感性はだれにもある人間の本性です。これを疑う人は、人間とは何かと云うことを考えなければならないでしょう。感性とは何かについては、後で立ち入って考えますが、ここでは、感性を人間像のレベルで捉えるとどうなるか考えてみたいと思います。デカルトは西欧の近代を象徴する「我思う、ゆえに我あり」という有名な言説をのこしました。つまり、人間は、あれやこれや考え、疑う本性があるが、そう考える「私」が存在しなければ不可能である。それだ

から、「私が考える（思う）ということは、間違いなく私が存在することである」とデカルトは云った訳です。この言説は、人間の存在を思うことに結びつけていますが、ここで「思う」という言葉は、事実上「考える」を指すと解釈されています。つまり、「我考える、ゆえに我あり」という言説として、それは、理性を中心とする西欧の近代化、更にその後の世界の一大規範となって、その流れは現在にまで至っていると云って過言でないでしょう。

これに対して、人間のもう一つの本性である感性は、近代社会において主導的役割は与えられず、実質的には無視されて来たと思えます。今まで、典型的な西欧の理性ないし知性についてはデカルトを初め多くの人物や人間像が議論されて来ましたが、感性についてはそれに相当する議論は見当たらないように思います。それゆえ、感性を象徴するような人物あるいは人間像について考えることは意味ある事と云えるでしょう。人間の理性に関する多くの事が、デカルトのやったことから導かれたように、感性を象徴するような人物や人間像の認識は、感性の意義や全体をどう理解するかに関わる重要な事が新たに分かって来るかもしれません。

私はここで、パスカルに注目したいと思えます。パスカルは「人間は考える葦である」という箴言で有名ですが、デカルトに劣らず、自然科学や数学で現在にも伝わる大きな足跡を残しています。その意味でも、理系・文系の壁を越えるというこの連載の冒頭お話しした目標のためにも登場するに相応しい人物と思えます。

例えば、流体力学に関する、静止流体の一部に圧力を加えた時、流体内のどの部分も同じ大きさの圧力が加わるというパスカルの原理や二項展開の係数に関するパスカルの三角形などは理科や数学の教科で習うほどの基本的成果です。更に興味ある事は、パスカルは機械式ですが、最初に計算機を考案し、それはライプニッツを経由して現在の計算機へも大きな影響を与えています。

ところで、「人間は考える葦である」という箴言は、パスカルの死後集められ、編集出版された「パンセ」に遺されたものです。この箴言は、「人間は、身体は一くきの葦のように非常に弱いものであるが、しかし、思考するものである」と解釈されています。他にも多くの箴言を遺していますが、「心情（感情）には、

理性の知らない、それ（感情）自身の理性（理屈）を持っている」などが知られています。

パンセは、パスカルがキリスト教弁証論のために遺した草稿断片を集めて編集されたもので、編集により種類もあるようですが、第一部「神なき人間の悲惨」、第二部「神とともになる人間の至福」となっています。第一部では、神を失った世界での人間の空しさを描いて、現代の実存主義的な人間分析に通じる思想が、また第二部では、真理は目が開かれぬ限り見えぬこと、見えるためには愛さねばならぬというパスカルの論理が見られます。特に、理性の及ばぬ心情と愛の秩序に最終的な真理への門が開かれると述べるところにパスカルのパトスを感じます。そこに、パスカルの理性を超えてゆこうとする道が示唆されているように思います。

パスカルは後半生の中心を信仰に投じていたため、今日彼の評価は割れる可能性があると思います。信仰の問題を別にしても、彼は自然科学のみならず、多くの箴言にあらわれているように、日常生活で起きる種々な問題のような、異質の問題にも正面から向き合っており取り組んでいます。つまり、彼の思想の柔軟さや発想のしなやかさにパスカルの感性の特徴が表われていると思われま

す。デカルトは何冊も完成された著作を遺して、近代西洋の入り口で大きな役割を担ってきましたが、パスカルは簡単な断片のような形の記録を遺しただけでした。今後、感性の立場から、彼の思想を分析することは大変興味ある問題のように思えます。感性全般の理解が深まれば、今後大きく見直されるのではないのでしょうか。

ところで、感性を深く理解するためには、どういう切り口から考えるのが良いかが問題です。私は「感じる」を切り口にするのが良いと思います。理由は、「感じる」ことが知性や認識の入り口に相当しているからですが、詳しくは以下で議論しましょう。

### 「我感じる、ゆえに我あり」

表題の言葉はもちろんデカルトの言説「我思う、ゆえに我あり」をもじったものですが、深い感性ということを考える上で、「我感じる、ゆえに我あり」

は良い標語ではないでしょうか。だいぶ以前からそう思っていた私は、ひそかに気に入っていましたが、残念なことには、その言葉を使う人が他にいることを知って少しがっかりしたことを覚えています。その人は渡辺慧といい、今から40～50年ほど前に「認識学」ということを提唱しました。数理哲学者の渡辺にとっては、「我感じるゆえに、我あり」という言説は、私のこのころの存在を基に、物の中にそれと似たものを見つけることによって、物そのものの存在を主張するアミニズムを手助けする、決してポジティブな薦められる言説ではありませんでした。

しかし、ここでは、そうした他者の存在論的な議論とは全く別の問題として「感じる」ということを考えますから、「我感じる、ゆえに我あり」という言説の評価も変わるはずです。つまり、我が感じるものが、我ありと云うことを裏付ける材料になると思います。しかし、我感じるということは、論理的に実証可能なことからではないので、「我感じる、ゆえに我あり」という言説自身は論理的に証明されるような主張とはならないことに注意したいと思います。

上で、この「我感じる、ゆえに我あり」という言説が感性を把握するための良い標語であると云いましたが、それは、人が持つ「感じる」という性質の重要性を強調したかったためです。このシリーズのテーマは感性ですが、感性以前の問題として、既に何度か云いましたように、一般論として、近代は「知る」ことに極端に重心が置かれ、その前提に相当する「感じる」ということに対しては粗末で、不当な扱いをしてきました。そのことが感性の理解にとっても、今大きな障害になっていると思うのです。

さて、「感じる」ということについては質的に異なる幾種類かの感じ方があり、それらにどう対処するかが課題になります。ここで、異なる種類の「感じる」について、最短の説明をしたいと思います。

まず、私たちが何かを認識する場面を考えてみましょう。朝起きてカーテンを開けて窓の外に目をやる時、そこに様々な色が組み合わせられ、複雑な形のもものが空間を占め、時間とともに移り変わっていきます。

そうした色や形がどのようなものであるかを感じて捉えるのが、感覚の働きです。私達は視野の中でも、特に時間的に変わらない形や色をした（何かの物

体の) 部分を集中して捉えますが、それらが草や木、あるいは鳥などといったものに対応しているでしょう。この対応は知覚に相当します。このように実際には、知覚は感覚と切り離すことは難しく、連続した過程になっています。しかし概念としては、知覚は感覚情報をまとめ上げ、何か一つのまとまった物に対応させる基本的な働きを指すものとされています。

続いて、感性に対応した「感じる」を取り上げましょう。少なくとも、感覚や感情と云う言葉の意味は生物などで一度は習ったはずですが、「感性」については別で、多くの方はマスコミ等の記事から得た使用法に依存していて、理解もバラバラのようです。

そのため、ここでは、感性の基本的側面を美学の助けを借りて理解することにします。美学に関する説明は一切省いて、結論を云えば、「感性」を感覚としての精神（こころ）、あるいは感覚的な精神（こころ）と捉えることです。感性をこのように捉える時、「感性」が「センス」という言葉に非常にぴったり重なる事が了解できると思います。何故、「感性」がカタカナ日本語である「センス」にぴったり合うのか不思議ですが、とにかく、感性をセンスに対応させると納得できることが沢山あります。その幾つかを以下で紹介してみましょう。

まず、「感性」は対象の {善し、悪し} を第一に問題とすることに対応して、センスは {良い、悪い} とは云っても、センスが {正しい、正しくない} ということには決してならないことを確認できます。また、日本語の「センス」に





は、「趣味」という意味が含まれていて、センスが良い事を趣味が良いと表現します。このことは、感性の基本的な面を捉えていると云えるでしょう。一方、趣味は英語で言う方がはっきりしますが、「taste」に対応します。その taste には「味わい」、「風味」の意味が含まれていて、日本人のもつ深い感性の領域に達します。このような言葉の対応は、言葉によって感性を捉えられる可能性を感じさせます。

また、英語で「センス」は「Sense」になりますが、この Sense に関して、もう一つ付け加えましょう。「Sense」は通常ある一つの「感覚」を意味します。複数の感覚が同時働く場合、共通感覚と云われることがあります。それは英語で「Common Sense」となります。この Common Sense には常識の意味もありますので、語源的に考えると、常識と共通感覚は同じルーツを持つという興味ある示唆が得られます。

もう一種の感じ方としての感情 (Emotion) については、日常的に豊富な経験があるにも拘らず、未だ基本的な理解も十分と云えません。また、その受け止め方には、理系・文系の間我国と外国との間で大きな差異があるよう思われます。ここに感性の基盤である心の分野の研究の遅れが象徴的に現れています。ここでは、広い意味の感情 (Emotion) を情動 (Emotion)、情念 (Passion) と狭い意味の感情 (Sentiment, Feeling) に分け、狭い意味の感情は、無意識の情動が意識化され、自覚された状態とする見方があることを紹介するだけに留めたいと思います。

感情についての他の見方や感性価値論等については、紙幅の関係で次回以降に回すことにします。